

『成唯識論』の二種生死説について

加藤 不二夫

『勝鬘經』を根本の教証として、『成唯識論』では二種生死が説かれている。しかしその内容は、『勝鬘經』本来のものとはかなり異なっている。そこで、(1)『成唯識論』の二種生死は『勝鬘經』とどのように異なっているのか。(2)またその相違は如何なる理由に基づくのか(その背景になっている思想について)。以上の二点を考察するのが本研究の趣旨である。

一 『勝鬘經』との相違点

① 一乘真実と三乘真実の相違

『勝鬘經』に於いて二種生死が説かれた本来の目的は、一乘真実を明らかにする点にあった。即ち阿羅漢・辟支仏が涅槃を得ると説かれる三乗の教説が方便であることを示す為に、二種生死によって、二乗は三界の分段生死を断じて、さらに変易生死を受けて仏果に向かう存在であることを明らかにしたのである。それに対し『成唯識論』は、変易生死を受ける位を不定姓の二乗と得自在の菩薩としている。このように変易生死の二乗を不定姓というのは、変易生死を受けずに分段生死を断じて涅槃を得る定姓の二乗の存在を認めるからであり、『成唯識論』は三乘真実の立場で二種生死を解釈しているのである。

② 相続の煩惱の相違

『成唯識論』が、二種生死を三乘思想の上に展開することを可能にしているのは、煩惱障・所知障の二障である。この二障を二種生死相続の煩惱と定義することも、『勝鬘經』と異なっている。分段生死の縁となる煩惱

『勝鬘經』——四住地と起煩惱——三有の断を障げる

『成唯識論』——煩惱障・涅槃を障げる(三乘共通の煩惱)

変易生死の縁となる煩惱

『勝鬘經』——無明住地・涅槃・菩提を障げる

『成唯識論』——所知障・菩提を障げる(菩薩のみの煩惱)

③ 必然的生死と意思的生死の相違

『成唯識論』の変易生死は、『勝鬘經』の変易生死が無明住地を縁とする必然的生死であり、過失の意味を有するのに対し、菩薩の悲願による意思的生死として、肯定的意味を有している。

『勝鬘經』の変易生死——無明住地より生じた無漏業——直接の因

『成唯識論』の変易生死——現身の因の有漏業——直接の因

——所知障より生じた無漏業——間接の因

* 七地以下の菩薩は、猛利なる悲願を起こすために、所知障の法執の力を借りるとされる。

無漏業たる「上求菩提下化衆生」の悲願が、現身の因の有漏業に力を与え、意志的に生死を相続させるのが、『成唯識論』の変易生死の意味である。

二 『成唯識論』の二種生死説の背景

① 廻向菩提と無余涅槃

『瑜伽師地論』には、無余涅槃に於いては、廻向して菩提に向

かうのは不可能であると説かれている。即ち菩提を得ぬままに無余涅槃を得る者を、定姓の二乗とするのである。それに対し中国の一乗の諸家は、無余涅槃より廻向菩提可能なことを示しているが、唯識思想では現身の因としての有漏業を存する有余涅槃が廻向菩提の限界点とされる。それ故「成唯識論」でも不定姓の二乗を、「彼は有余涅槃を証得する纔た、決定して心を廻し無上覺を求む」(大正三十一・五五c)と定義し、無余涅槃を得る定姓の二乗を認めるのであり、これらの者が変易生死を受けるとはしないのである。

有余涅槃―まだ現身の因の有漏業が残っている―廻向菩提可能無余涅槃―もはや有漏業の力が尽きた― 廻向菩提不可能

② 「煩惱を留め置く」ということ

『撰大乘論』は菩薩の修道のあり方を、「煩惱は伏するも滅せず」(大正三十一・一五〇c)と説く。即ち諸の菩薩は、二乗のように速やかに煩惱を断じようとはせず、仏果に至るまで留め置くとするのである。それは現に生死に住することが、菩薩道の絶対条件になるからだと考えられる。それ故「成唯識論」でも、

菩薩は現觀を得已りて、復た十地の修道の位に於いて唯だ永に所知障を滅する道のみを修す。煩惱をば留めて願を助けて受生す。(大正三十一・五一c)

といい、諸の菩薩は煩惱を留め置くことにより、有漏業を断尽せず、「下化衆生」の為に生死の場に住し、「上求菩提」の為に所知障を断じていくことが説かれている。

③ 菩薩の無住涅槃

煩惱障の現行を起ささない菩薩は次生の因となる有漏業を造ることもなく、分断生死を受けることはない。しかし煩惱障の種子(あるいは有漏業の種子)を持つことにより、二乗の如き無余涅槃に住する訳でもない。そのような測り難き境遇は

無住涅槃とは、世間・声聞・独覺の生死、或いは涅槃に安住するに同ぜざるが故なり。

(大正三十一・四三四c 『無性撰論』)

という唯識思想の無住涅槃と一致するものであり、それが「成唯識論」では、菩薩の悲願によって克ちとられた「三界内」の変易生死であるとして、解釈されるに至ったと考えることができる。